



★2019年10月～12月の予定★

【事務所関係者の動き】

アンマン勤務

(JICAヨルダン事務所内)

宮原 千絵 所長(ヨルダン事務所長兼務)

柳 竜也 次長(ヨルダン事務所次長兼務)

今村 誠 職員(ヨルダン事務所兼務)

成田 英幸 職員

河合 正吉 企画調査員

水野シヨー 真希 企画調査員

高島 淳 企画調査員

宮越 麻衣子 企画調査員

【公休日】

10月 6日 October War

12月 25日 Christmas Day

12月 29日 年末休暇

12月 30日 年末休暇

12月 31日 年末休暇

「アハバール・カシオン」

～名前由来について～

「アハバール」とはNewsを意味するアラビア語。「カシオン」とはダマスカスの北に位置する旧約聖書にも記されている山の名前です。

●お知らせ

アハバール・カシオンは[JICAホームページ](#)からのみご覧いただけます。
本ニュースレターは四半期に一度の発行です(原則4・7・10・1月を予定)。

●事務所から

2011年4月28日以降の関係者国外退避に伴い、JICAシリア事務所は現在JICAヨルダン事務所内に日本人所員執務所を設けています。
本号では、「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム(JISR)」より第1期生の卒業・就職についてのインタビュー、およびレバノンの水分野に関する調査報告、世界銀行との会合についてのレポート等を掲載しています。

●事業報告

「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム(JISR)」 第1期生 学生から社会人へ

※JISR(ジスル)はアラビア語で「架け橋」の意。

2017年9月に「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」の第1期生19名が来日してから2年が経ちました。それぞれの大学院のカリキュラムのもと、日々学業に励んでいます。そうした中、今年の夏に修士課程を修了し、日本の企業で働き始める研修員が4名います。(2019年9月現在)

今回はその4名の研修員の来日後の2年間の努力の様子や今後の展望について、ご紹介します。

※4名へのインタビューは2019年8月に実施しました。

◇ガイス・アッゼーンさん(男性)

この2年間を振り返ると、まず、来日できたことが大変な幸運でした。関係者の皆様に感謝しています。

大学院においては、学生のマナーがよいことに感銘を受けました。学業については、それまでに経験した受け身の学びとは異なっており、日本の大学院では先生の指導を受けつつ、学生自ら考え自主的に取り組む重要性を学びました。

その他、この2年間の日本における生活を通じて感じたのは、自分の行いはまた自分に返ってくる、努力していると周りの様々な方々が自分を励ま



談笑するガイス・アッゼーンさん(奥)と
A.A.さん(手前)

してくれることでした。こうしたことが、私の内面の変化にもつながったと考えています。

この秋から、日本の企業でエンジニアとして勤務します。将来的には、日本で博士号を取得し、その後シリアに戻りたいと考えています。平和復興のためには次世代のシリア人を育成することが必要であるため、シリアに大学を作り、教鞭をとりたいと考えています。

◇A. A. さん(男性)

2年前来日した時は、新しい環境に

とてもワクワクしていました。来日してから難しいと感じたことは、日本語の習得でした。大学での授業は英語で行われていたため、授業は理解できたのですが、一方で日本語の単語や文法の勉強が出来ても、会話の練習の機会があまりなかったためです。しかし来日してしばらく経った頃、ある日本人家族と出会い、彼らとの交流のおかげで日本語が上達していきました。

修士課程修了後は、IT企業で自身の専門のAIを活かした仕事に携わる予定です。就職を目前に控え、気持ちが大きく高まっています。

◇A.H.さん(男性)

2年前、それまでの生活では成し得なかったことが出来るようになるの思いと希望を胸に、来日しました。同時に文化の違いや日本語の難しさに対する不安も感じていました。しかし、こうした不安は、時間が経つ中、笑顔でコミュニケーション

をとれば問題ないと感じるようになり、解消されていきました。学生生活や日常生活を通じて感じたのは、日本は平和で安全であること、日本人が勤勉で穏やかなことです。また、言葉の上達などを通じて、自分に自信をもてるようにもなりました。間もなく日本の企業に入社し働き始めます。会社に貢献しながら、引き続き日本での生活を続けていきたいと考えています。

◇A.B.さん(男性)

来日してから戸惑ったのは、文化の違いや日本語の難しさでした。また当初は1人きりの生活に慣れることも必要でした。しかし、国際学生寮での多様な人たちとの交流や、日本語を学び始めたことで、生活しやすくなり大変充実した時間を過ごすことができるようになりました。また、日本をよく知りたいと思い、日本人の友人と様々な土地を訪れました。苦手であった刺身も食べられる

ようにもなりました。

学生生活を終えるまでに働き先を決めるべく、就職活動にも力を入れました。自国と大きくことなる日本での就職活動においては、周りの方々から様々なサポートを得て、求人情報の集め方、履歴書の書き方、面接での対応などについて教えてもらいました。その結果、自身の専門を生かせるソフト開発を行う企業に就職することができました。今後日本語をさらに磨いてクライアントと日本語でやりとりを行い、職場で活躍していきたいと考えています。

上記4名は就職を機に、JICA研修員としての身分は終了します。今後は、まずは日本企業の社員として、2年間で学んだことを糧に会社や社会で活躍してくれること、また将来的にはシリアの復興ならびに日本とシリアの架け橋のための先導者となってくれることを願っています。

●調査報告

上水道セクターにおける水質管理に係る基礎情報収集・確認調査(山岳レバノン県)

レバノンは、電力、水、廃棄物処理を含め、社会インフラの整備と公共サービスの質において大きな課題を抱える国の一つです。20年以上に渡ったレバノン内戦の影響に加えて、近年では2011年に始まったシリア内戦による難民の流入があり、公共サービスを提供する政府傘下の各公社に、さらに負担をかける状況となっています。

JICAは上水と下水の分野を含めた調査を先行して実施していますが、その調査結果を踏まえてさらに「上水道セクターにおける水質管理に係る基礎情報収集・確認調査」を実施、この中で飲料水の安全性の確保を図る目的で塩素滅菌処理を行う上水消毒施設を修復しました。2018年度の調査によって3カ所(Aley, Jbail, Kafra)の施設が改修され、2019年度においては4地点(Qaa, Ain El Cheikh, Mkalles, Qornet El Hamra)における設備を改修することになりました(写真①)。



写真①: 改修前(写真上)と改修後(同下)のQaa Water Station

9月27日に在レバノン日本国大使館の檜岡善文参事官のご出席のもと、Ain El Cheikhの施設で調査用機材引渡し式典を行いました(写真②)。この取り組みの結果、一つの上水消毒施設による水の供給先は少なくとも2000世帯、大きい場合には数万世

帯にも及び大きな効果があることが確認できました。

調査の一環で修復された設備は、ベイルート・山岳レバノン水公社に属しており、同公社の職員に対する技術指導を9月23日から25日にかけて行いました。エネルギー・水省では、今回の調査で効果が確認された上水消毒施設を、当該地域に80カ所ある同様の施設のモデル・ケースとしての活用を計画しており、今後、レバノン国内の他水公社の職員へのトレーニングにも活用されることが見込まれています。(高島)



写真②: 引渡し式典の様子

JICA-WBG Deep Dive Meeting

2019年9月3日、マシュレク地域¹の支援に関し、JICAと世界銀行グループが合同でディープダイブ会合をレバノン・ベイルートで開催しました。本会合の目的は、同地域の現状と課題を掘り下げ、両組織が共通の認識に立ち今後の支援の方向性を検討することで、現地では坂本・中東欧州部長をはじめ、広沢・イラク事務所長、宮原・シリア兼ヨルダン事務所長以下10名が出席しました。

同会合では坂本部長がJICAによる当地域で支援に係る発表を行い、またその後の支援対象国別のセッションでは、各担当者間で活発な議論が交わされました。

【シリア支援にかかるセッション】
＜議論概要＞

- ・シリア危機の長期化により、今後も地域経済と社会に対して非常に大きな影響が出ることが予想されるが、長期的な解決策の提示には、政治的な決着を待たなければならない
- ・両組織は、シリア危機における政治的な決着がついた場合、復興に向け、迅速な対応が求められるとの見解で一致している。しかし、現状はシリア国内および政府機関へのアクセスは限定的であり、更なる情報を得てネットワークを拡大することは困難である。
- ・シリア危機により数百万人ものシリア難民を受け入れているレバノンとヨルダンでの影響を緩和するため、経済的な支援が必要である。



坂本・中東欧州部長による発表の様子

- ・シリア国内の状況に関する情報収集とネットワーク拡大のため、両組織とも国際的なパートナーとの関係を強化する。
- ・世界銀行は、最新の状況を分析すべく、戦争による犠牲者、およびシリア難民の移動に係る2つのレポートを発行。

＜今後のアクション＞

- ・政治的決着後の復興ニーズへ即座に対応するため、両組織は情報収集とネットワーク構築に最善を尽くす。
- ・世界銀行は、調査結果およびその分析結果をJICAと共有し、今後の議論の輪にJICAを含める。

【レバノン支援にかかるセッション】

- ・SBM：School Based Management（学校関係者が主体となった学校運営）において、JICAと世界銀行は協力関係を強化することに合意。JICAは、既存のパイロットプロジェクト

のレビュー、および制度化のための学校改善計画（SIP）の提案および最終化をするための技術支援を行っている。世界銀行は最新のSIPを活用し学校への財政支援を行う予定。計画全体の目的は、学校の自律性と説明責任を高め、教育分野への支援効率を改善することである。

- ・水、電力および雇用創出の分野においても連携の可能性を議論。



ディープダイブ会合の出席者

今回の会合は双方の職員にとって、情報共有、ブレインストーミング、そして実践時のコミュニティ構築ができるまたとない機会であり、新たな協力関係の出発点となりました。両組織は、今後も継続した議論の場を設けることで合意しました。

¹マシュレク地域：アラブ・イスラム地域北東部（主にシリア、レバノン、ヨルダン、イラク）

◇アハハール・カシオンのバックナンバーは以下URLよりご覧いただけます。
<https://www.jica.go.jp/svria/office/others/newsletter.html>

● 離任挨拶

マアッサラメ！お疲れ様でした！

青年海外協力隊員
氏名：若月 万平

2年間ユースセンターで美術や工作を中心に活動しました。最初はリキシャデコレーションや新潟の郷土工芸である鯛車の制作などを子どもたちと行い、異文化紹介のようなどころからのスタートでしたが、子どもたちが日本からの客を迎えたアラブ式のコーヒーセレモニーでは地域の年配者との関わりを作ることが出来ました。籠編みでは、子どもたちがそれぞれ工夫を凝らした籠を作りました。最後に実施した絵本のアクティビティでは、たくさんの絵やお話が出てきました。グループで絵を描く方法やテーマについてなど、まだまだ試行錯誤しながら展開できるスペースがあることを感じています。今後も絵を描いたり制作を楽しむ中で、子どもたちの世界が広がっていくことを願っています。（作品の写真是次ページ）



新潟の郷土玩具である綱車とその制作方法を応用した模型の制作



アフリカの楽器であるカシシを制作



1700枚以上の子どもやシリアの人の描いたお話と絵を配置したドローイングマップより(抜粋)

Artisans from Syria

今号より、シリアの伝統工芸とそれを制作する職人の方々を紹介していきます。第1回はダマスカスの寄木細工です。



様々な寄木のパーツ

シリアの寄木細工はダマスカス地域の伝統工芸であり、主に木箱や高級家具の装飾に利用されます。その歴史は16世紀にまで遡り、シルクロードを渡って日本に伝わり、箱根寄木細工などのルーツになったともいわれています。

木材は主にオリーブ・クルミ・松・レモン・ユーカリなどシリア産材のほか、ヨーロッパ産のメープル

などを使用し、赤や黒などの濃い色はアフリカ産材も使用して表現します。装飾の一部として加工した真珠貝を埋め込むことも多いです。

寄木材の作り方は、日本の伝統工芸とほぼ同じ工程ですが、日本のように完成した寄木材をカンナで削り出すのではなく、それぞれの寄木材を薄く輪切りにし、土台となる木箱や家具の表面にニカワで張り付けていきます。そのため、製品の枠内にすべてのパーツを上下左右対称に並べるにあたっては、事前に緻密な計算が必要となります。

◇寄木細工職人：アブドゥルラフマン・シャアバーンさん

同じく寄木職人であった義兄に10歳で弟子入りし職人歴は38年。11年間の修業を経てダマスカス郊外県東



寄木の木箱を制作するシャアバーンさん



シャアバーンさんの寄木細工作品

グータに工房を構えました。本場ダマスカス仕込みの技術による作品は、日本の工芸品と比べても、勝るとも劣らない高品質と言えます。

シリア紛争の影響により、東グータの工房を手放し、2013年にヨルダン・アンマンに家族で避難してきました。しばらくは知人の工場の二階を間借りし制作を行っていましたが、2019年夏、ついにアンマン市内に自身の工房を開くことができました。現在はイギリスの財団が運営するショールームや、ヨルダン国内のデザイン会社の発注に応じて展覧会等に作品を納入しており、今後は「アンマン市内に開設される予定の職業訓練校で、後進の指導も行っていきたい」とのことです。(成田)

ホームページ

www.jica.go.jp/syria/index.html

お問い合わせ先(E-mail)

sr_oso_rep@jica.go.jp

お知らせ

アハバール・カシオンのバックナンバーは左記JICAホームページより閲覧いただけます。次号の発行は2020年1月の予定です。寄稿やお問い合わせはメールにて受け付けております。

編集後記

朝晩が冷え込むようになり、ヨルダンも秋の気配となりました。10月のアンマン市内は、デザインウィークや音楽祭、マラソン大会、オクトーバーフェストなどイベントが目白押し。昼間は相変わらず真夏のような日差しですが、中東にいながら「芸術の秋、スポーツの秋、食欲の秋」を実感できそうです。(成田)